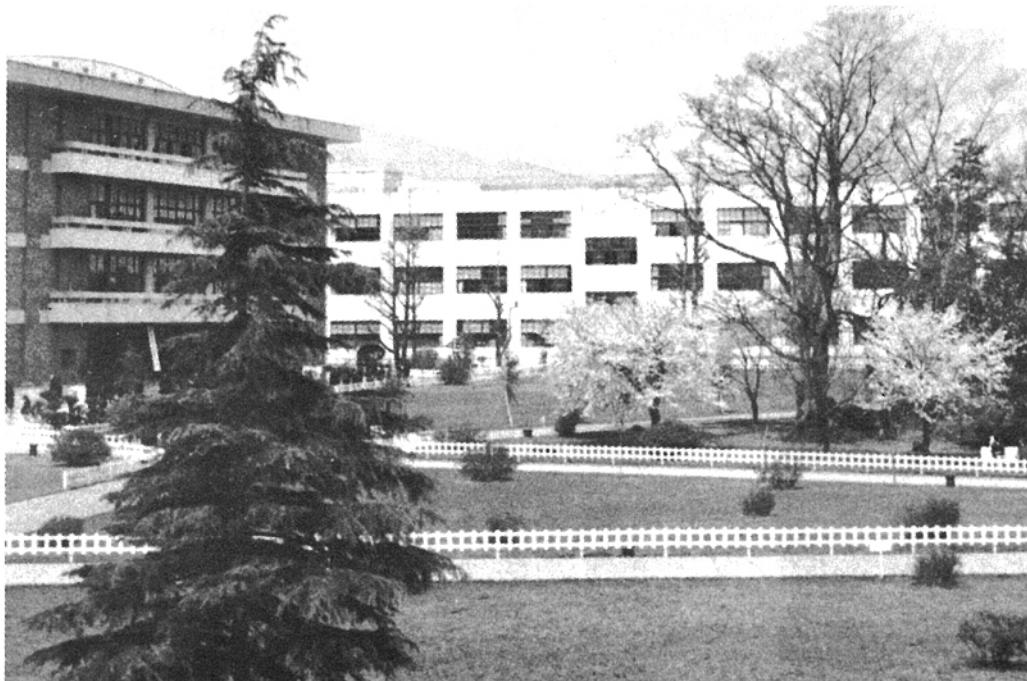


日本大学三島同窓会大報

第 9 号

昭和 53 年 3 月 1 日
静岡県三島市文教町 2
日本大学三島同窓会発行



「和五十二年度総会開く」

日本大学三島同窓会昭和五十二年度総会は、母校日本大学三島学祭三日目の昭和五十二年十一月三日午後四時から、同大學記念館で開催された。

総会は、遠藤逸雄氏の司会で進められ、染谷徳昭氏の開会の辞、種房繁会長の挨拶の後、山内茂氏を議長に、井川一見氏を書記に佐野勝己・梶千佳子両氏を副議長に選出、議事にはいり、次の事項が報告、承認された。

① 役員について

前年度事業報告について

前年度決算報告について

監査報告について

本年度事業計画について

本年度予算について

⑦ その他

なお、事業報告・事業計画は、

瀬川一男事務局長、予算・決算は



総会役員

石川貞夫会計担当常任幹事、監査報告は中島敏男会計監査から、それぞれ報告が行われた。（詳細は会報第八号参照）また、その他では、三島市長選に本会から推薦され見事当選された、奥田吉郎副会長からお札の挨拶が述べられ、関係からお札の挨拶が述べられ、関熱心な総会風景



関野さんの閉会の辞
野世津子氏の閉会の辞で無事終了した。

今総会は、大学祭行事との関係で、若干若手会員が少なかつたようであるが、短大各科出身の女性会員が多数出席され花を添えた。

懇親会

—なごやかに開かる—

同窓会懇親会は、総会終了後同会場に鈴木昇六・玉津徳太郎両先生を始め、関係の先生方をお迎えし、午後五時から開催された。井

川一見氏の司会で会が進められ、種房繁会長の挨拶について、大学を代表して玉津徳太郎先生の御挨拶、鈴木昇六先生の音頭で乾杯

し、なごやかな雰囲気のうちに、各テーブルでの懇談にはいった。今回は古顔が多く見られたが、なかなか五期生が大いにハッスルした感じ。

会は六時過ぎまで続けられ、染谷氏の大節など出て楽しいひとときであった。最後に結城勇一氏の音頭で万歳三唱、「また来年あいましょう」と、玉井暁男氏の閉会の挨拶でそれぞれの二次会に散つていった。

種房会長のあいさつ



玉津次長のあいさつ



日大節 一指揮は染谷徳昭氏

結城勇一氏の
音頭で万歳



また来年
あいましょう



鈴木・藏並両先生

常任幹事会で準備

総会・懇親会準備のため、昭和五十二年十月三十一日午後六時から、母校三島学園の本館で常任幹事が開催された。準備分担や当日の出番については、できるだけ各科各期にわたるよう配分され、また会場設営・受付事務にも万全を期すよう分担された。このほかに、同窓会報第八号発行の推進方について、打合せが行われた。

出席役員は、皆それぞれ業務多忙にもかかわらず、奥田吉郎・瀬川一男・遠藤逸雄・石川貞夫・角田義廣・井川一見・染谷徳昭・内藤正昭・柴田正・土屋貞明・相田信次・小出博・小早川隆義・久保田博明・久保田勝・佐野勝巳・土屋忠得・田中由雄・鈴木正八・宮沢愛子・伊丹裕子の各氏が出席三時間に及ぶ討議を行った。



寒気を侵して百花に先んじて咲く、清楚で気品のある梅花がほろびる季節となりました。三島同窓会の諸兄姉には、それぞれに社会的な所を得て、積極的に活躍して居られる趣き、まず、何よりも御同慶に存ずる次第であります。

れるように思われます。本学は皆さんすでに御承知のように、四年制大学の一般教育課程、短大商経科・家政科・文科・建築科・機械科、付属高校からなる複合学園であります。したがつて卒業生も多様な人間形成過程を経た者の集団であると言ふことができましょ

わが日本大学三島同窓会は、この学内機構の特色を生かし、他に見られない近代的組織をもつ、新



御挨拶

て独自の学風を樹立するにいたりました。この学風は年々本学に集まつては、散じてゆく数千の学徒によつて継承され、社会的にその真価が認められていることは、皆さんの周知のこととありますよう。

大学の真価は、なんといつても大学特有の学問的水準と学問研究を通しての人間形成の高度化にあり、教授と学生の心の交流と、卒業生の社会的活動によつて規定さ

るようになります。それは各グループの代表者により、幹事会・常任幹事会・総会という合議機関を整備し、年度毎に総会その他の会合をもち、年度計画を協定し、それによつて年々活発な事業を推進していることあります。会の役員も、創立当時の功労者から今長を、各科から常任幹事を、各科各年度から幹事を各選出すると、先輩・後輩の連携も、融和もう、仲間集団の形成に成功してい

前述しましたが、
には、創業時に
いて来られた方々
にして急逝さ
に衝撃的なこと
本学は安藤先
を慰めるため
つて札をつく
四等瑞宝章を贈
た。本学に職を
は、学園を思

以来、本学と共に
要藤公平教授が一
るという、まこ
が起こりました
王の功を称え、英
に、三島学園葬を
しました。国家も
績を顕彰されま
と奉する教職員一
先生の遺志を継

同窓生各位に
の事情を推察し
支援の程お願ひ
おかげで、
の教育計画も
に進み、学生
生生活と研究
期試験も終わ
ました。秋に
日間にわたり
催し、所期の

く念じております
おかれても、この
され、旧に倍する
い申し上げます。

間 開 三 前 學 球 調 頭 え 三 島 同 窓 が
園に新風を
れ、伝統と
努力が必要
す。教職員
のとなりま
卒業生の理
を祈念する
して挨拶と
(文理)

子部の設置は、三島
焼き込むことが期待
新風との調和に大き
くなるものと思われ
の一致協力はもとよ
解と支援が不可欠の
致します。

寒氣を侵して百花に先んじて咲く、清楚で気品のある梅花がほころびる季節となりました。三島同窓会の諸兄姉には、それぞれに社会的な所を得て、積極的に活躍して居られる趣き、まず、何よりと御同慶に存する次第であります。

母校日本大学の校門は、卒業生からみると実社会への出口で社会からみれば青年学徒の入口であると言うことができましよう。

人と集団との心的交流の通路であるということになります。本学は創業以来、先人によつて築かれた土台に立脚して、文字通り日に日に新たに発展し、創立三十周年を終て、今開拓して人間形成

れるようと思われます。本学は皆さんすでに御承知のように、四年制大学の一般教育課程、短大商経科・家政科・文科・建築科・機械科、付属高校からなる複合学園であります。したがつて卒業生も多様な人間形成過程を経た者の集団であると言つていいであります。

わが日本大学三島同窓会は、この学内機構の特色を生かし、他に見られない近代的組織をもつ、新



美しく醸し出します。こうして、行事ごとに、盤となり、実助・友愛の実歓の美しさをされます。この力は、激会において必ずものと期待させて、皆さ大学三島は着

し、学園の發
もつて先生の
を誓った次第
先生亡き後
さずの原則に
ついで古いと
肖私が文理學
學部三島次長
なりました。
身であります
協力によつて
導と三島學園

は、責任者不在を
展に総力を結集し、
英靈にこたえるこ
とあります。

大学祭当日に行わ
云々懇親会も例年以
フ、招待をうけた関
心激をうけると共に
教師冥利を感じたこ

青春雑感

佐々木健夫



青春の園

道見俊広



成人日の街で、美しい装いの女性と新しい背広の逞ましい若者達の群に逢う。青春の象徴のよくな、その瑞々しい姿は正月の清々しい風物詩である。若さというのほんとに羨しいものと思う。

頑健な肉体に、はち切れる勇気を持つてすれば、どんな苦しさにも

耐えていける。それは無限の可能性を秘める年代であるが故に、財宝よりも貴い価値があると言えよう。希くば、この若者達に仕事でも、スポーツでも、己の青春の総てをぶつけて悔いのない対象を見つけてほしいと思う。

私達が三島時代賭けた青春の大きさ程、後年顧みて、その代償としての成果が、いかに全生涯において実りのあるものかを発見するからである。ただ徒に、單車のスピード感應に埋没させ、レジャーの空しいさい果てに、散華させる青春であつてはならない。然し、青春は若い年代だけの占有稀少価値の

幸いにして私達のまわりの自然

人間科学には、まだまだ未知なる神秘さ美しさに満ち溢れている。この美しいもの、神秘なものを探求めて、自らの生き甲斐を見い出し、青春を謳歌するのにこと欠かない幸せを感じるべきものと思う。

(昭23・24・25、法学部在学、日本トムソン株岐阜製作所副所長)

親友とはいひものである。年をとればとるほどお互に懐かしくなるのが親友である。同窓会も年と共に待たれる所以です。日本大学三島同窓会も例年大学祭の十一月三日、文化の日に開かれています。親友の上野君より「今年是非出席してくれ、一緒に行こう」と誘われた。

母校を訪れた同窓百余名、総会を終え懇親会に入る。学部次長玉津先生の挨拶、顧問鈴木先生の音頭で乾杯し、和やかに進められていく。二十数年振りに会う同期、互に交わす盃、宴も酣となると、彼方此方で山の雲が湧き出るようにな話が盛りあがり、海に月が上るようには声もエスカレートする。正に「語り尽くす山雲海月の情」である。更に知己同志が心情を吐露しあつての話しぶりは、同窓会な

どではの雰囲気でした。

ら集いし個性豊かな学友との交流に、諸先生のユニークな講義に、学園の諸行事に、下宿先での生活などを通じてである。印象深い二三のことを繰れば、入学式の前日に学園正門前に立つたとき、春うららか、富士と桜が見事に調和しその情景にいたゞく感激した。

卒業以来、札幌の地にあって、全国に散った学友と、年に一度の年賀状の交換をしている今にしてこそ価値ある「青春の園」である。

三島の学園は青春の園として、すでに巣立つて二十二年の昔にあるが、私の人生にとつて悔いのない場であった。流れゆく日々が充実していた。それは学園の自然環境に、全国か

ものであろうか？いや私達の仲間にも、はたち代で既に悟り切つた如く、気力冴えない人も居る反面、中年になつても毎日瑞々しく意欲を燃やして仕事に挑戦する人を何人か発見できよう。松下幸之助氏の言葉をお借りすれば「青春は心の若さである。常に希望と信念に溢れ、勇気に満ちて日々新しく活動すれば、青春は永遠にそ人のものである。」

同窓会と学園生活を偲ぶ

結城勇一



る意気をもつた同志が、抱負と理想を語り合うと云う清ばぐたる学園でした。

二年生の時、私は自治会で副委員長と総務部長を兼ね、諸先輩が築いた学園の清浄化に努めてきました。学生運動も現在とは全く異なり全学連と私学連の二大学連によつて統率され、日本大学は建学の道を主眼とする私学連に加盟していました。時世も綏靖の世ではなく、学生選挙権問題、早大事件日大汚職事件等、学生が世を罵り人を愚弄すると言う問題が多く、自治会にとつて難問を抱えること屢々、困惑のあまり玉津先生に相談したところ、先生は泰然自若として微笑を浮べながら「君」三島市にある竜沢寺の高僧、山本玄峰師の言葉を知つてゐるか。「心配」と言う文字だよ。「君達は物事について大いに心配したまえ」、だが「心痛」してはならぬ、心を配ること大いに結構だが心を痛めてはならない、知恵と慈悲とが一つに溶けた行為を実行することだ、と悟された言葉。即ち唯心的思想教育は、今も尚私の脳裡から去ることが出来ません。

このように学園生活の中で、親しい先生の教えを受けたもの無慮幾千人、彼等は政界、実業界、あるいは教育界に、その他各々の能力に従つて社会に寄与し国家に貢献しておりますのは、實に先生御薫陶の賜であります。又母校の校運が今日の隆盛を見るに至りましたのも、亦先生のお力に俟つところ多かつたのであります。私は、実に先生御薫陶の賜であります。

成工業所常務取締役（昭27・28、経済学部在学）
母校の発展と諸先生並びに同窓生の御健康をお祈り申し上げます。

夢と不満と反省と

朴澤英憲



霧の街釧路より、詩情豊かな三

島をなつかしながらお便りいた

します。

「人間はどうがいても、一つの大きな流れに逆うことはできない。かといって、いつもぬるま湯

の中で自己満足にひたつていては

歴史をみるまでもなく、下降線を

たどる運命におしこまれてしま

う。いつも夢（理想）をもつて、責任ある行動と反省が必要で

ある。これは三島学園を去る最後

の日に玉津学生指導委員長が、私

たち学友会役員に述べた言葉のよ

うに記憶している。

早いもので十七年が過ぎた。い

ま自分の理想とは何かと、改めて

問い合わせ最近感じていることを

記して責任を果たしたい。

私たちは自分の周囲に、いつも

ある程度の不満がなければ進歩が

ないようである。大学病院や総合

病院に長くいると、知らぬ間に自

分の仕事に誇りをもつようになっ

ている。自分はもはや一人前であ

り、与えられた条件に満足し、酔

つているとその誇りを少しでも傷

つけられようものなら、この上も

なく口惜しく反攻にでてくる。こ

のような時、もう一度周囲を見わ

たし、自己を直視して、反省する

（昭34・35、岩手医進在学、労働福
祉事業団釧路労災病院内科部長）

日に日に新たに

高木利子

（旧姓斎藤）



学而寮と私

木崎有里子

（旧姓相馬）

いま私は、七名の医員と内科診療に研究に、多忙ではあるが現実を直視しながら、患者医者関係を大切に人間として力強く生きたいと考えています。こんな夢ばかり追つていれるのは、独身なるための気楽さなのだろうか。いや、いつも未完のままの万年青年であります。願いが、自分を進歩させないのだろう。要是理想や不満度の問題なのだろうから、若さをもつ心の方が一層重要な思えます。

（先生には先刻お見通しのようでした）

オリンピックの年には、また会

いましようと約束した五人の仲間

あれからもう十六年。温かく包んで下さった先生と、かしましい仲間達。学問と青春の思い出を刻む

全国津々浦々の方言の飛び交う夕入寮と同時にホームシックにかかり、飛んで帰った初めての休み。

国語辞典でも判からぬだろう、「皆んな帰りますか」と言う

先生の声、階下へ遠ざかる足音。古くなつた雨戸を開け



（昭38・39、家政コース在学、主婦）

たあの懐い日々。
思いがけぬ場所で思いがけなく

聞いた校歌に、束の間の青春との邂逅をみた想いであった。母校愛

人は、最近少なくなったように思う。これにはいろいろの要因があるが、一つには対話という基本的なヒューマンリレーションシップが欠けているのではないだろうか。三島学園の最大の長所はここにあつたと今、改めて思うのです。いつまでも続けてもらいたい伝統

と思います。

しかし、不満をもちすぎて、何もしないのはもつと悪いことだと

思います。人は年齢に相応した不満をどの程度にもち、それをどう解釈していくかがより大切だと思います。

昨今、医の倫理が問われ、福祉や医学教育が問題視されていますが、それぞれの立場に理想や不満があつて、一側面が強調され過ぎているよう思うのです。例えば北欧諸国の医療制度のように完成されたものには淋しさがあり、不満だらけの日本の現状には、夢多き点では幸いといえるかも知れません。

澄んだ秋の午後、私と夫が知人の結婚式に出席の為、あるホテルのロビーで式を待っている時であった。ロビーのざわめきを通してうのです。

私は在学時決して模範的学業優秀な生徒ではなかつたので、校歌などはきっと疎かに歌い過ごしてきました。ロビーのざわめきを通して静かに浸み入るように聞こえてきた歌があつた。」日に日に新たに文化の華の「私は一瞬身体を硬くして耳をそばだてた。どこかの

歌が熱く胸を過ぎり、私も又聞きたがら我知らず涙ぐんでいた。私は在学時決して模範的学業優秀な生徒ではなかつたので、校歌などはきっと疎かに歌い過ごしてきた年にちがいなのに、この愛惜は一体何なんのであろうか。あの未熟な日々、私が自分などというものの欠片も解らぬままに言いたいことを言い、したいことをしてい

部屋の披露宴であろう。男性ばかりのコーラスであつたが、それは充分訓練された美しい歌声であつた。異郷で国歌を聞くと思わず涙するよく人が言つけれど、正しくそんな感じで、青春への様々な想いが熱く胸を過ぎり、私も又聞きたがら我知らず涙ぐんでいた。日に新たに私は私の人生を精いっぱい生きていこう、とそんな想いをこめて、いつか私は人目も憚らず聞こえてきたこのコーラスに自分の歌声を重ねていた。

（昭38・39、家政コース在学、主婦）

在学当時の想い出

中 茜 幸 治



我が母校を想い出すとき、必ず木造ぼろ校舎と銀杏並木を想い出します。神武景気が終焉となり、なべ底景気と呼ばれる不況時代に入りつつある暗い世の中が、我々の青春時代であった。希望に燃え一步でも二歩でも向上したいと勉学に意欲を燃やし、苦しい内にも向學心が満たされ、良き友情に結ばれて清清しさと懐かしさを感じます。あの頃は仕事を終るのを待つて急いで自転車で登校し、鎧坂の急坂を駆け登り銀杏並木で一服、教室にたどりつくともう競うようにS君に席を陣取っているS君、たとえばK君等々想いだすとなつかしい仲間ばかりである。

人工衛生の打ち上げられた学生時代からもう20年の歳月が流れ、その仲間も社会の中堅として活躍している。電話局の課長となつたK君、県庁の係長として活躍しているS君、学校の先生となつたH君等これら成長が楽しみの仲間だ。学校が終えると広瀬のラペー やジュン喫茶によく立寄り、人生・恋愛・思想等の話しを閉店までした友。この様な良き友を得られたことは学業以上に私達の成

果であつたといつても過言ではない。又我々生徒を暖かく見守り導いてくれた教師陣もぜいたくな構成であつたと思う。

倫理学の玉津先生、今はなき心理学者の安藤先生、国文の沼尻先生、経済学の大淵先生、商学の高橋先生、体育の服部先生、生物学の青木先生等、なつかしい恩師である。担任であつた青木先生とは三泊四日の白樺湖・蓼科旅行での想い出もあり、卒業後三回程の同窓会で毎日母校の銀杏並木を通じ抜け事務所に通うのであるが、通学中の学生群を見るにつけ、当時の我々とはなにか異りを感じる。

学生会誌の巻頭にも「学園社会の実践活動から得た貴重な体験をもとに豊かな知性と道義を兼ね備えた有能な社会人とならねばならぬ」と記されているのを読むにつけて、社会人としての中堅の年代になつた今日、痛切に責任を感じる幸いにも商経科の知識を身につけ経営労務コンサルタントとして独立し六年、中小企業の相談相手として学習実践の繰り返しであり生涯勉学に励むことができるることは幸せだと思う。趣味の油絵も20年間の創作活動が続けられ、やつとアトリエを建築これから10年間が創作活動の勝負の時期だと思っている。現在の基礎を在学中に吸収できたことを感謝しています。

(昭31・32、商経科在学、中茎労務管理事務所・自営)

学生時代、そして今

藤澤敬子



昨年の友からの年賀状に「四分の一世紀を過ぎ……」とあった。学生完全に過ぎ去ってしまった。学生気分の抜け切らぬまま。

が入らないのかなあ……なんて

(昭45・46、建築科在学)

目的があつたわけではなかつたので、勉強も与えられたものをこなしていくのが精一杯で、特に製図には悩まされた。提出して「ほつ」とする間もなく、次の課題を説明しますから……』という残酷さ。そして実験やら実習、そのレポートと追いまくられた。レポートでの行きづまりを隣りの機械科研究室に行き指導をうけた事もあつた。どうして機械科には女性が入らないのかなあ……なんて

(昭45・46、建築科在学)

言わながら友と一人して聞いたものだ。

そんな私も、難なく卒業させてもえた。そして就職。当初は慣れる事に一生懸命。ところが、仕事に慣れ、人間に慣れしていく我慢できず、昨年退職してしまつた。女であるが故、誰もわけなど聞かない。『結婚するんだろう』

である。とにかく寂しかった。そして、まだ定職はなく、好きやはり軸となっているのは、短大で二年間に学び得たものである。勝手な事をして過ごしているが、やはり軸となっているのは、短大で二年間に学び得たものである。

三島学園の想い出

杉山謙



私が三島学園における生活から早くも五年の月日が過ぎてしまつたのであるが、今なお鮮明に当時の生活ぶりが思い出されるのである。講義・クラブ活動の思い出、クラス委員連絡会議における活動の思い出と、僅か一年間であつたことは幸せだと思う。趣味の油絵も20年間の創作活動が続けられ、やつとアトリエを建築これから10年間が創作活動の勝負の時期だと思っている。現在の基礎を在学中に吸収できたことを感謝しています。

しかし、その過ごした日々の充実さは、僅か一年間という短期間なものであつた。実生活は、僅か一年間という短期間なものであつた。

思い起こせば、私が充実した日

私にとって三島学園における生活は、僅か一年間という短期間なものであつた。私は考えられないほど、いろいろな思い出が脳裏に焼きついているのである。特に懐かしく思われるのは、何といつても、クラス委員連絡会議を通しての活動だろう。苦しかつたこと、楽しかったことが、今さ

をして、幸運にも私は、現在、再びこの素晴らしい三島学園で、日々を送る機会に恵まれたことを心から感謝する毎日である。

(昭48、経済学部在学、日本大学文理学部三島・学生課)

学生生活の一コマ

遠 藤 逸 雄



学生時代の想い出は、人それぞれに懐しく数々印象に残っているものである。私にとって永久に忘ることの出来ない思い出を徒然に記してみたいと思う。私達が三島学園に入学した当時は、教養課程二年間の大学生活だったのでも、同級生はもとより先輩とのつながりも深く、また先生方に接する機会も多く得られたことが、今振り返ってみて本当に有意義だったと思っている。現在のように一年間だけでは、三島学園の真の良さを判らずに学生生活を終ってしまうのではないか!

私は、二年目に当時学生課長であつた玉津先生に役員（会計）をやれと指名されたが、勉強と役員は両立しないので辞退しますと即座に断つたが、玉津先生は私をみつめて「君は学者になるのか、それとも社会に出で大成しようと思っているのか！ 社会に出るならこの大役を引き受けなさい。言うなれば活きた勉強をこの私が教える。」という。私は家に帰り早速この話を両親に伝えたところ、先生の言葉に素直に従うべきだというので翌朝先生によろしくお願ひ致します、といつて会計を引き受けた訳だが、玉津先生のその言葉は、何

時迄も私の脳裡に焼きついて忘れることができないばかりでなく、今日の私があるのも先生のお蔭であると云つても過言ではなく、私自身常に感謝している。

昭和二十七年七月十九日、この日は私達が玉津先生を団長として全国遊説の第一歩として北海道遊説に三島を出発した日である。綿密なスケジュールのもとに、この遊説がただ単に日大三島だけのものではなく、オール日本の大看板を背負つて行くことになり、福本、村野、宮崎、谷越、平森の五人の弁士に、本部より奥田吉郎（現三島市長）が加わり、総務として玉津先生、渡辺勝一（現東京電気大

学総務部長）と私が会計担当になり、先輩達への挨拶、弁士の健康管理と北海道在住の総務責任者、安田、渋谷両君との連絡をとり、約一ヵ月間北海道の主要な各地を遊説したことが、昨日のよろに蘇つてくるのである。

私達の在学当時は、先生を囲んで大いに語り、時には夜を徹して飲んだり歌つたりしたものだが、現在の学生達にはこうした風潮が見られないようだ。二度と返らぬ

学生時代を悔いなく過した私は、本当に幸せに思い、現在の仕事に對して生甲斐を感じ、多忙な中にも楽しい毎日を過ごせる自分を、つくづく幸福者と思っている一人である。

連 絡

玉津先生を 囲 む 会

事務局だより

桜文会

昭和52年度の桜文会総会・懇親会は、左記により開かれます。

日 時 昭和53年3月19日（日）

午前10時から
記

場 所 田代グリル（三島駅前）

桜栄会

昭和52年度の桜栄会総会・懇親会は、左記により開かれます。

日 時 昭和53年3月5日（日）

午前11時から
記

場 所 じゅん（三島市本町）

昭和53年度 総会について

昭和53年度の総会および懇親会は、母校三島学園大学祭の中で、昭和五十三年十一月三日（金・午後四時から六時まで）の予定で、三島学園内記念館で開かれます。会員の殆んどにご案内を差し上げることができますが、毎年この日が総会開催日になつておりますので皆様おさそいあわせの上、ご出席下さるようお願い申し上げます。

☆總会

日 時	昭和53年11月3日（金）
場 所	記念館（予定）
内 容	ささやかですが、母校の先生方をまじえ、三島学園出身者の交流と親睦をはかりたいと思います。

☆懇親会

日 時	昭和53年11月3日（金）
場 所	記念館（予定）
内 容	ささやかですが、母校の先生方をまじえ、三島学園出身者の交流と親睦をはかりたいと思います。

◇最近の新聞から拾つた話題を一つ。学生とタバコの関係について国立がんセンターの疫学部長・平山先生は、「親が子に残すことのできる最大の遺産は、たばこを吸わないしつけをすることです。学校教育で生徒に与える最大の指導はたばこを吸わせないことです……」と。

この頃、とくに付属高校の列車通学生の中に喫煙者が目立つようですが、お見掛けの節は、是非積極的に御注意をお願いします。

◇会報十号は続いて編集準備にはいります。原稿の協力方よろしくお願いいたします。

給食事業協専務理、
(昭26・27、経済学部在学、吉原

場所 日本大学文理学部・三島
校舎内、記念館